私たちのユニバーサル社会

久留米市立青陵中学校　　２年　岩根　伊佐

皆さんは、ユニバーサルマナーという言葉を知っていますか。私は最近まで、ユニバーサルマナーという言葉を知りませんでした。私がその言葉を知ったのは、去年の夏休みに夏期講習に通った塾で、「ユニバーサルマナー検定」の案内をもらった時でした。それは障がい者や高齢者など、多様な方々へのサポートやコミュニケーションの方法を習得する検定だと説明してあったので、私は受けてみたくなりました。

私がなぜその検定に関心を持ったかというと、それには二つのきっかけがあります。一つ目は、私自身が松葉杖と車いすの生活を経験したことです。去年の春、私は足の怪我をしてしまい歩くことができませんでした。その時は、父親の助けがないとトイレやお風呂などの日常動作ができず、車の乗り降りからちょっとした段差まで、外の動作でも大変な思いをしました。

もう一つのきっかけは、バスケットボール部の人たちと一緒に車いすバスケットの試合を観戦したことです。見に行くまで、車いすでどうやってバスケットができるのか不思議でたまりませんでした。私は毎日バスケットボール部でたくさんランニングをしたり、ジャンプしたりと、足をフルに使っているので、足を使わずにバスケットをすることが考えられなかったからです。ところが実際に見に行ってみると、車いすバスケットの選手は、力強く手でタイヤを回しながら車いすで素早く移動し、互いにぶつかり合って激しいプレイを繰り広げているではありませんか。私はそれまでなんとなく、足が不自由になったらスポーツはできないものだと思っていました。しかし、車いすバスケットの選手の方々は、私たちとは少し違うルールではあるけれど、バスケットボール特有の素早いスピード、高度なチームプレイやテクニックを見せてくださり、私はびっくりしました。私はその試合を見つめながら息をのみました。

試合の後、選手たちが片づけを済ませて移動しているところを見かけて、私はさらに驚きました。なぜなら車いすバスケットの選手は本人も車いすに乗っている状態なのに、大きな荷物を乗せたもう１台の車いすを押しながら移動していたのです。私はとっさに、「うわぁ、大変そうだなあ。僕でも試合の後は大きな荷物を持って歩くのはきついのに誰か荷物を持ってあげて手伝ったほうがいいんじゃないのかな。」と思いました。でも、私はなんと声を掛けたらいいのかわかりませんでした。しかし、よく見ると何人もの選手たちがそれぞれ２台ずつ車いすを操りながら、楽しそうにおしゃべりをして移動していました。それは私たちの試合の後の和気あいあいとした雰囲気と同じでした。彼らも私たちと同じようにスポーツを楽しんでいたのです。

このようなきっかけから障がい者への関心が生まれ、ユニバーサルマナー検定を受けることになりました。内閣府の令和５年のデータによると、日本では６５歳以上の高齢者の割合が２９％、障がい者の割合が９％、３歳未満の子どもの割合が２％です。私たちはかつて皆赤ちゃんで、歩くこともしゃべることもできず親など身近な人たちの助けによって生活していました。その私たちもいつかは年老いて、再び足や目や耳が思うように使えなくなるかもしれません。あるいは若いうちに身体に障がいを負うかもしれません。そう考えると、ユニバーサルマナーとは、特別な人たちのものではなく、私たちみんなに必要なものなのです。そもそも、障がい者や高齢者と一言で言っても、できることとできないことは一人ひとり違います。これができないと決めつけるのではなく、困っている様子の人を見かけたら、「何かお手伝いできることはありませんか。」と尋ねてその人のニーズに合わせた行動をすることが大切であると思います。

ユニバーサル社会とは年齢や性別、障がいがあるかないか、文化の違いにかかわりなく誰もが暮らしやすい社会のことです。私が思い描く「ユニバーサル社会」、それはすべての人がお互いに尊重し合い、助け合って暮らしていける安心で楽しい社会です。私たち一人ひとりがお互いにユニバーサルマナーを心がけ、ユニバーサル社会が実現できれば、こんな素敵なことはないと思います。皆さんも、誰もが暮らしやすい社会について、今一度考えてみませんか。